
京大上海センターニューズレター

第 78 号 2005 年 10 月 10 日

京都大学経済学研究科上海センター

目次

○ 上海センター・自動車シンポジウムのご案内

○ 内蒙古大学日本文化祭を視察して

+++++

京都大学上海センター・中国自動車シンポジウムの御案内

日時・会場 2005 年 11 月 5 日(土)12 時 京都大学法経総合研究棟大会議室

プログラム

挨拶 京都大学総長 尾池和夫

第 1 部 市場はどこまで拡大するか——需要面の定量分析——

報告(1)現代文化研究所中国研究室研究主事 廖静南

報告(2)野村総合研究所事業戦略コンサルティング部

グループマネージャー上級コンサルタント 北川史和

報告(3)三菱総合研究所産業・市場戦略研究本部産業戦略研究部

国際産業研究チーム主任研究員 赤羽淳

(社名五十音順)

第 2 部 パネル 品質・開発力をどう見るか——供給面の定性分析——

松下電器産業グローバル戦略研究所首席研究員 安積敏政

元東風本田発動機技術顧問 小澤晃

小島衣料代表取締役社長 小島正憲

ダイハツ工業製品企画部副部長 津曲正人

元いすゞ中国事務所所長・中国担当部長 中村研二

愛知大学経済学部教授 李春利

(氏名五十音順)

懇親会

なお、事前のお申し込みがなくても御参加頂けますが、会場準備の都合上、下記まで E メールで御連絡頂ければ幸いです。シンポジウム、懇親会とも参加費はございません。

京都大学大学院経済学研究科 塩地洋

shioji@econ.kyoto-u.ac.jp tel:075-753-3428 fax:075-753-3492

+++++

内蒙古大学日本文化祭を視察して

北京大学国際関係学院留学生 加藤嘉一

爽快な秋の季節。私は、9月24日に内蒙古大学で開催される「日本文化祭」を視察するため、内蒙古自治区フフホト市を訪れた。

いきなり話が飛ぶが、実はこの度、日本国際交流基金のサポートの下、現在中国各地の大学に在籍している日本人留学生を中心に、「日本国際交流基金と中国における日本人留学生が相互補完的に協力、提携し、日中文化交流を中国国内で促進する。」という主旨のもと、「国際交流基金留学生モニター～留華ネット～」が発足した。全国各地に核となるメンバーを配置し、「日本」をより広範に中国の方に伝え、日中交流にも従事していくという構想だ。方法論として、ネット上（HP、メーリングリスト、メルマガ）での情報共有、交換、提供が中心（国際交流基金からの情報、各地で開催された様々なイベントも含めて）となる。もちろん各大学、地域における中国側カウンターパートも育てていく。私はモニター代表として今後日中交流に自らじっくり取り組んでいきたいと考えている。

前置きが長くなったが、今回はその「留華ネット」最初の試みとして、上記のとおり「内蒙古大学日本語文化祭」が内蒙古大学代表の学生を中心に開催された。私は、イベントの様子、内蒙古を代表し、日本語学習が非常に繁栄している内蒙古大学の学生の問題意識、日本観などを視察するため、国際交流基金の支援の下、現地へと足を運んだ。以下、現地で私が感じたこと、考えたことを描写する。今後、日本の対中政策、日中関係を考える上でも、重要な内容も含まれていると思うのでぜひご参考いただければと思う：

今回の日本文化祭は、内蒙古大学に在籍する日本人留学生、フフホト市において、JICAの青年海外協力隊として活躍なさっている方々など、フフホト市の日本人が団結して約一ヶ月という短い準備期間で開催までこぎつけた。協力団体は、JICA、国際交流基金、内蒙古大学、老人活動中心である。同大学の日本語学部の学生も準備過程から企画、開催に加わり、当日会場にはフフホト市の他大学で日本語を学習している人、もちろん非日本語学習者で日本に関心のある方も駆けつけていた。

まずここで言及しておきたいのが、開催の中心である日本人を筆頭に開催者がイベント当日までに経験した数々の「苦労と困難」である。皆さんご存知のとおり、中国において、イベントを開催するのは容易なことではない。政府、大学当局から数々の規制が加わるのは普遍的現象だ。当局は「人が集まること」を極端に避ける。特に今回は、「9.18」の直後ということで敏感な時期であった。後でも触れるが、内蒙古自治区は比較的抗日感情が薄い地域である。特にモンゴル族は、（あくまでも相対的にだが）歴史的、民族的に漢族に嫌悪感を持ち、日本人に好意感を持っているようだ。今回のイベントを指揮した学生は開催前日に：「準備を進める過程において、様々な妥協をせざるを得なかった。政府、大学は間違ってもイベントの開催を支持しない。今回も場所を提供しただけだ。その場所も当初は「屋外&大規模」で行われるはずであったが、結果的に規制されてしまい、「屋内&小規模」でやることになった。大学側の「領導（リーダー）」も、会場で（当時の西北大学のように）何かが発生しても「責任がとれない」ので、イベントにはほぼ関わってこなかった。関わったのは、日本語学部の比較的若手の先生と留学生を管理する事務所の（地位のあまり高くない）方だけである。宣伝もまともにできなかった。宣伝の対象にできたのは、日本に比較的好感を持つフフホト市内にある大学の日本語学部の学生と僕らのクラスメートだけで、ビラを配布することも規制されてできなかった。僕たちも、当日は常に何が起こるかかわからないという危惧を持ちながらやらざるを得ないだろう。」と語っていた。

そして当日。関係者は朝6時過ぎから準備に取り掛かり、私は8時過ぎには大学に到着。会場準備からじっくり観察することができた。文化祭は午前10時～午後13時まで、内容

は、

〈メインステージ〉1.浴衣着付けデモンストレーション&ファッションショー。2.民謡花笠音頭。3.茶道デモンストレーション。4.三味線。5.民謡小原節。

〈サイドスペース〉1.浴衣を着ての写真撮影。2.日本語名づけコーナー。3.味噌汁、おにぎり試食会。4.劇「おむすびころりん」5.展示会（漫画、絵画、など）から構成され、終了後一人一人にアンケートを配り、フィードバックを図ろうとしていた。

さて、10時前後になると会場が人で埋まり始めた。関係者の話によると、予想では250人だったそうだが、実際は明らかに300人を超えて出入りした人間を含めれば400人近くに上る大盛況であった。座れない人が半分以上で、皆立ちながら会場の雰囲気を楽しんでいた。イベントは順調に進んだ。会場の観客も日本語ができる方、日本に関心を持つ方がほとんどだったので、当初から危惧していた反日的な敏感な動きをする方もおらず、皆集中してステージを楽しんでいた。12時からのサイドスペース部門でも、おにぎり、味噌汁はほぼ一瞬でなくなり、浴衣の着付けでは希望する人間が多すぎてパニック状態、展示会でもアニメなど現代文化に殺到する若者の姿を目に飛び込んできた。皆が楽しんでいる間、私は参加者（観客）の中国人学生とインタビューもかねて交流していた：「今回の文化祭は本当に成功だね。僕も日本への理解がより深まったし、日本人留学生の人たちもすごく苦勞して準備してくれた。感謝しているよ。このような機会を通じて、日中両国民が相互理解を深めることは有意義だし、来年もぜひ参加したいな」（日本語学部男子学生）。「今日中の政府間では様々な摩擦が生じているけど、私たちはこの会場でお互いに理解しあい、友達になることができた。私たちは私たちでがんばっていくことが重要だね」（日本語学部一年生の女子学生）「すごく緊張したけど、この日本文化祭で司会を務めることができたことはいい経験になります。来年もぜひやりたいですね。将来？もちろん日中の架け橋になることが目標です。僕の使命かな」（日本語学部男子学生、司会者）などなど。50人以上の学生と話をしたが、驚いたことに、一人も日本に対して批判的な、マイナス的な発言をする学生がいなかった。それどころか、皆私と連絡先を交換したり、写真を一緒にとったり、ものすごく友好的であった。中には、非日本語学部の学生で、この文化祭の雰囲気と日本人留学生の頑張りに感動して、「日本に対して理解を示すことも必要ですね。今後まずは日本を知る努力をしていきたいです。」と語ってくれた女子学生もいた。あの時間、あの空間において、「日本ブーム」が猛烈にヒートアップしていたのは紛れもない事実である。實際上、開催するにあたり、様々なトラブルが発生し、様々な危惧が存在していた。ただ、終わってみれば、多くの人間が日本に対してより理解を深め、日本の文化に関心を持ち、「日本」を通じてあの時間を楽しみ、笑顔で会場を去っていった。私自身、また多くの中国の方と友好関係を築くことができなるともいえない満足感に浸っていた。

また、今回の日本文化祭を通じて、新たな発見もあった。それが、内蒙古における「日本語熱」と「モンゴル族」についてである。「内蒙古では反日感情がすごく少ないんだ。社会全体にストレスがあまりないのも影響していると思うけど、大学内、日本語学校を含めて日本語を勉強している人間はものすごく多い。しかもここで日本語を勉強した学生の就職率は100%なんだ。しかもみんな日本に行きたがってる。経費の問題などで、みんなものすごく苦勞しているけど、日本に行つてがんばっている人間も多いんだ。」と語ってくれたのは、今回の主催者の一人、退職後同大学の学部に入學し、若者と日ごろから真っ向勝負で交流している64歳の男性だ。確かに大学内の日本語熱は雰囲気として私も強烈に感じた。そして、「内蒙古大学の日本語学部では、漢族とモンゴル族は完全に分かれて授業するんだ。モンゴル族の学生は日本語を吸収するのが圧倒的に速いから。彼らの言語は発音、文法共にすごく日本語に似ているから楽しみたいだね。語感が働くらしい。」（主催者のリーダー）「でも、モンゴル族の学生は遊び好きであまり勉強しない。逆に漢族の学生がすごく刺激

を受けて、猛勉強する。卒業するころにはトントンになるかしら。確かに、語感やモンゴル族の学生のほうが優れているけど。彼らのレベルは他の地域の日本語学習者より高いと思

うわ。」(女性日本語教師)。「日本語熱」、「比較的少ない反日感情」、「モンゴル族と漢族の相乗効果による高い日本語レベル」、「就職率 100%」、「より多くの学生にとって日本への留学が現実味を帯びてきている」という現状は我々日本人に何かを考えさせるはずだ。

ここからは個人的見解になるがもう少しお付き合いいただきたい。

今後、日中経済が益々緊密になるにつれて、高いレベルで日本語を操る中国の人材を確保したい日系企業は増える一方で、沿岸部だけでなく、内蒙古も含めた内陸部も視野に入れて人材確保に努めていくことも現実的に必要になってくるはずであろう。文化的にも、日本の文化が浸透しやすく、日本語学習者が多い地域というのは戦略的に抑えておきたいところだ。そして、内蒙古の特殊な社会状況に関連した人民の対日観は政治的にも深い意味を持つ。少し抽象的な言い方になるが、今後日本が対中政策の一環として、政治、経済、文化、教育など各領域において、「地域戦略」を意識的に練っていくことが益々重要視されていくように思う。内蒙古フフホト市内蒙古大学にて行われた日本文化祭を通じて私はそう感じた。

翌日、夕方の飛行機まで時間があつたので、朝から草原に向かった。晴天の下、馬に乗って大草原を走りながらまた色々考えてしまった。澄んだ青空と新鮮な空気によって、あまりにリフレッシュしすぎてしまい、分析など到底できなかったが、頭の中ですっきり整理できたこともあった。現在の日中関係に存在する多くの矛盾や摩擦は時代的、国際情勢的にみても、ある意味当然生じるもので、一つの問題を解決したからといって全面的に関係が改善されることなどありえない。日中両国が粘り強く長期にわたり解決していくしかない。そして、その一つ一つの解決には往々にして政治的決断が不可欠なことは言うまでもない。そう考えると、今回の日本文化祭のような「草の根」活動は成果がなかなか形になって見えてこないし、きりがいいのかもわからない。私自身無力感を感じることもある。ただ、日中両国にとって極めて重要な 2005 年に、日中関係が様々な内圧、外圧により政治的に緊張し、経済、文化交流にも明らかな悪影響が生じている状況下において、国際交流基金のサポートの下、内蒙古大学に在籍する 10 数名の日本人が一致団結して、様々な困難を乗り越えて「日本」を 400 人近くの中国人に伝え、感動させたことも「事実」である。日中両国それぞれの国家を構成する企業、組織、留学生、学者、メディアなど各主体が草の根的に各自の外交を展開し、日中交流の「実態」を豊富にしてこそ、政治的決断もより効果的に生きるはずだ。今回、大変な苦勞をなされた方々に敬意を表すと同時に、今後とも自分にしかできない外交を精一杯展開し、日中関係を見る目をじっくり養っていきたいと考えている。